

秋冬ネギにおける生育初期の害虫防除 ～タネバエ・タマネギバエ・ネダニ・アザミウマ類～

- つくば市南部ではタネバエの被害が毎年多く発生しています。
- 3月以降**気温が高く**、害虫の早期被害が懸念されます。
- 連作等により、酸性土壌が増え、ネダニの発生も増えています。

(1) タネバエ・タマネギバエ

<症状や害虫の特徴>

- 春先、定植後に**幼虫が茎盤部を食害**
- 食害後は生育が劣り、外葉が枯れる
- 多発時：枯死（苗が引き抜ける）
- 卵から成虫：20℃条件で約25日間

<発生条件>

- ・未熟堆肥や緑肥すき込み後の期間が短い
- ・ネギ被害株の匂いで誘因



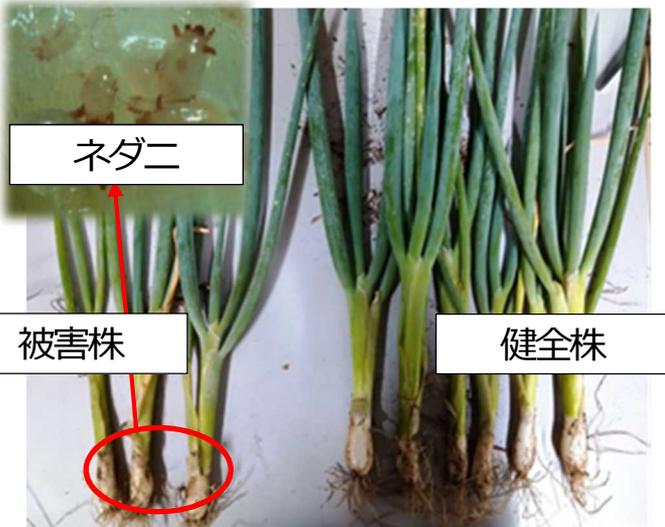
(2) ネダニ類

<症状や害虫の特徴>

- 茎盤部・根を食害**
- 外葉が黄化し、生育が停滞
- 卵から成虫：20℃条件で約10日間

<発生条件>

- ・初夏（6～7月）に発生増加（高温多湿）
- ・**pHが低いほ場では発生が増える**
- ・前作の残渣に由来し、土壌中に長く生存



(3) ネギアザミウマ

<症状や害虫の特徴>

- 葉に白いかすり状の傷が付く
→**被害痕から病害が発生**する
- 微小害虫であるため、増加後の防除は難しい
- 発生初期に増やさないことが重要

<発生条件>

- ・4月以降に急増し、**6月から9月にピーク**
- ・年間10世代経過し、夏は2～3週間で1世代発生
- ・**高温乾燥**を好む（気温の上昇に伴い発生が急増）

【タマネギバエ・タネバエに登録のある主な薬剤】



薬剤名	希釈倍率・使用量	使用方法	使用時期	有効成分名	作用機構分類
ジュリボフロアブル	200 倍※	灌注	育苗期後半～定植当日	クロラントラニリプロール チアメトキサム	2 8 4 A
ベリマーク SC	400 倍※	灌注	育苗期後半～定植当日	シアントラニリプロール	2 8
ミネクトデュオ粒剤	6kg/10a	植溝土壌混和	定植時	シアントラニリプロール チアメトキサム	2 8 4 A
ダントツ粒剤	6kg/10a	植溝処理土壌混和	植付時	クロチアニジン	4 A
ダイアジノン粒剤 3	5-8kg/10a	土壌混和	は種時 又は植付時	ダイアジノン	1 B
ダイアジノン乳剤 4 0	700 倍	散布	収穫 2 1 日前まで	ダイアジノン	1 B
デミリン水和剤	2,000 倍	株元灌注	収穫 2 1 日前まで	ジフルベンズロン	1 5

【ネダニ類に登録のある主な薬剤】

薬剤名	希釈倍率・使用量	使用方法	使用時期	有効成分名	作用機構分類
ジュリボフロアブル	200 倍※	灌注	育苗期後半～定植当日	クロラントラニリプロール チアメトキサム	2 8 4 A
フォース粒剤	9kg/10a 6-9kg/10a	作条土壌混和 株元散布	定植時 収穫 3 0 日前まで	テフルトリン	3 A
アプロードフロアブル	500-1,000 倍	株元灌注	収穫 1 4 日前まで	プロロフェジン	1 6
トクチオン乳剤	2,000 倍	株元灌注	収穫 7 日前まで	プロチオホス	1 B
ダントツ粒剤	6kg/10a	株元散布	収穫 3 日前まで	クロチアニジン	4 A

【ネギアザミウマに登録のある主な薬剤】

薬剤名	希釈倍率・使用量	使用方法	使用時期	有効成分名	作用機構分類
ジュリボフロアブル	200 倍※	灌注	育苗期後半～定植当日	クロラントラニリプロール チアメトキサム	2 8 4 A
ヨーバルフロアブル	200 倍※	灌注	育苗期後半～定植当日	テトラニリプロール	2 8
カスケード乳剤	4,000 倍	散布	収穫 1 4 日前まで	フルフェノクスロン	1 5
リーフガード顆粒水和剤	1,500 倍	散布	収穫 7 日前まで	チオシクラム	1 4
コルト顆粒水和剤	2,000 倍	散布	収穫 3 日前まで	ピリフルキナゾン	9 B
アクタラ顆粒水溶剤	1,000～2,000 倍	散布	収穫 3 日前まで	チアメトキサム	4 A
ウララ DF	1,000～2,000 倍	散布	収穫前日まで	フロニカミド	2 9

※ジュリボフロアブル、ヨーバルフロアブル、ベリマーク SC の灌注処理における散布液量：セル成型育苗トレイ 1 箱またはペーパーポット 1 冊（約 30×60 cm、使用土壌約 1.5～4 リットル）あたり 0.5 リットル

注意：有効成分が重複する薬剤がありますので、使用回数に注意してください。

【注意】 1 「2022年3月9日現在の登録内容です」 2 参考資料の作成に当たっては、農薬使用基準の内容について細心の注意をはらっていますが、農薬を使用する方は、必ず、**使用する前にはラベルを見て、対象作物、希釈倍率や使用量、使用回数等を確認し、農薬の誤った使用を行わないようにしてください。** 農薬散布時には風向、風速、散布位置やノズルの向き等に注意し、周辺作物に農薬が飛散（ドリフト）しないよう注意して行いましょう。特に、周辺作物が収穫期に近い場合は、栽培者と情報交換することが重要です。また、農薬の安全評価に新たな手法として短期暴露評価が導入されました。それにとともに、農薬によっては使用できなくなる作物が生じたり、使用方法の変更が行われる場合があります。短期暴露評価により使用方法が変更された農薬は、農薬容器のラベルに記載された使用方法ではなく、変更後の使用方法が記載されたメーカーのチラシなど、最新の情報に従って使用して下さい。最新の情報は、農薬の販売店や茨城県病害虫防除所のホームページ等で確認して下さい。

- ・薬剤散布以外に次の対策も実施しましょう。 ○**周辺雑草の除草**（害虫の寄生防止）
- 被害残渣の適正処理**（病虫害の発生源リスク） ○**薬剤散布時に展着剤を加え、十分な量を散布**
- 作用機構分類の異なる薬剤のローテーション散布**